

# 美の散策 #1

前衛——不幸な時代の処方箋としての

市原尚士

美術展の質を決めるのは、空間の広さや宣伝費の多寡ではない——。画廊香月で開催された九州派作家の展示を見て、そう思った。面積わずか4坪。猫の額のような、絶海の孤島のような画廊を同派7人による20数点が覆いつくした。

## 「九州派 / 東京地方 突如来演 2020」展

2020年12月7日～26日 画廊香月  
(東京・銀座、<https://g-kazuki.com/>)

作品写真は、すべて画廊香月提供



桜井 孝身 Takami Sakurai  
《無題I》1982年 F30

壁の右側には、暖色系のにぎやかな作品が。左側には、寒色系のクールな作品が並んだ。メゾチント、シルクスクリーン、油彩、木彫など技法や素材も様々だ。桜井孝身の「無題I」や尾花成春の「河の構図」、菊畑茂久馬の「二つのリンゴ」、そして磨墨静量の「青い光に」など、凝視を続けていても全く飽きの来ない良作を前に立ち尽くしていたら、自分の背が縮んで、会場が大きくなった。

九州派を概説するところなる。反東京、反芸術、反権威を標榜し、地域性を押し出した前衛運動を1957年から68年まで繰り広げた美術集団。コルタール、アスファルト、ムシロ、麻袋といった労働者の生活と結びついた素材の使用が特徴として知られる。桜井、菊畑、オチオサムらが主要メンバーで、インスタレーションやパフォーマンスなども展開した。全国的に安保闘争の風が吹き荒れ、九州では三池争議や労働闘争が繰り広げられた、いわば「政治の季

節」が彼らの活躍時期と重なっている。

本展に並んだ作品は1968年から2005年までの期間に制作されたもの。つまり、九州派終息後の作品ということになるのだが、画廊に並んだ作品は、世で言われているほど、政治色が強いわけでも、過激なわけでもない。むしろ、静謐でナイーブな印象が漂う。

尾花の次男で写真家の尾花基(福岡県うきは市在住)はこう語る。

「九州派は」誰も解散宣言をしたわけではない。1968年以降も長く制作を続けていた作家が多かった。桜井は2016年に亡くなるまで、自身のことを九州派と認識していたのではないか？」

父・成春も2016年に没するまで精力的に制作し、1000点以上もの作品が残っている。「作品がほとんどない」という過去の定説は、あくまで1957年から数年の九州派草創期の作品に限定

されるのかもしれない。黒ダライ兒、山口洋三らによる研究成果のおかげで我々、美術ファンも九州派のことを徐々に知りうるようになってはきた。とはいえ、まだまだ分からないことも多い、謎めいたグループであるのは確かだ。

1958年、東京都美術館で開催された「読売アンデパンダン展」に、小便をひっかけた「ゴミ」を出して、出展拒否第一号となったのは今でも語り草だ。一方、「東京地方」に殴り込みをかけると言いながら、東京の評価に依存していた不徹底さを指摘する声も。



尾花 成春 Shigeharu Obana  
《河の構図》1989年 F20



磨墨 静量 Seiryu Suresumi  
《青い光に》1988年 F3

九州派の今日的な意義は、共同制作の可能性を模索していた点だろう。同派の代名詞といってもいい、安価でインパクトのあるアスファルトを最初に使ったオチは、この「新素材」を一切秘匿せず、皆と共有した。自分だけ抜け駆けして、東京でメジャー作家になろうという意識は薄かった。今はやりのアート・コレクティブの大先輩ともいえる。

2020年は九州派の菊畑以外にも前衛作家の死が相次いだ。「絵を描くことは、命をかけた遊びであり、同時に命をかけた闘いでも

ある」とかつて筆者に語ってくれたポルターージュ絵画の池田龍雄は92年の生涯を閉じた。ポップ・ハプニングの秋山祐徳太子も亡くなり、ギャラリー58(東京・銀座)で立派な回顧展が行われた。

戦後の「前衛」を担っていた作家、運動体が目集めるのは、単なる懐かしさからだけではないだろう。黒を白と信じ込み、その逆を信じていた事実をすっかり忘れてしまう……ジョージ・オーウェル作「一九八四年」的な二重思考が横行した現代社会に息苦しさを覚えている人は想像以上に多

い。前衛が持っていた「怒り」の感情を取り戻し、二重思考を破壊したい。つまりは「本当の自由が欲しい」という飢餓感が強まっている。不幸な時代の処方箋、突破口として、前衛の値打ちは今後ますます高まるだろう。

(ジャーナリスト)

### 2020年11～12月の収穫7展

- ▽ TOKAS Project Vol.3 東京デトロイトベルリン  
2020年10月10日～11月8日 トーキョーアートアンドスペース本郷 (東京・お茶の水)
- ▽ 日野之彦「モデル」  
2020年10月16日～11月14日 SNOW Contemporary (東京・西麻布)
- ▽ 岡崎乾二郎 TOPICA PICTUS きょうばし  
2020年11月6日～12月12日 南天子画廊 (東京・京橋)
- ▽ ミヒヤエル・ボレマンス マーク・マンダース | ダブル・サイレンス  
2020年9月19日～2021年2月28日 金沢21世紀美術館 (石川県金沢市)
- ▽ 小作青史展  
2020年11月25日～12月18日 日本画廊 (東京・日本橋)
- ▽ 1990 Clay Rush  
2020年11月27日～12月26日 中長小西 (東京・銀座)
- ▽ 多田圭佑「CHANGELING」  
2020年11月1日～12月27日 rin art association (群馬県高崎市)